

# 年頭所感



## 新年挨拶

おおさか市町村職員研修研究センター所長 齊藤 慎

平成19年の年頭にあたり、新年のご挨拶を申し上げます。

皆様には、良き新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

ここ何年もの間、新たな年がよき年となるように祈ってきたのですが、ようやく今年こそ、その祈りが多少とも通じそうな気がします。社会的には、相変わらずさまざまな事件や暗い出来事が起こっており暗澹<sup>あんたん</sup>とした気分になることも多いのですが、一方で経済の回復とともに嬉しい話題も徐々に増えてきたように思います。なかでも地方自治体にとって最もよい話題は、長い間低迷してきた税金が増加傾向に転じたことではないでしょうか。これにより財政状況が多少とも好転することを期待しております。

このような将来への希望を表すものとして、『玉葉和歌集』\*に所収されている京極為兼の、

「木の葉なき むなしき枝に年くれて まためぐむべき春ぞ近づく」

があります。木に葉がついていない寒々とした風景を見て、気分が落ち込んでいても、そのままの状態が続くわけではなく、年が変わると暮らしやすい春がきっと来る、というような意味でしょうか。

さて、お陰さまで、マッセOSAKAも平成17年に記念すべき10年が終わりましたので、新たな「春」に向けてさまざまな準備と活動をしなければなりません。また、安倍内閣の重要課題の一つに教育が位置づけられるなど、社会的にも教育の必要性が再認識されつつあります。もともと日本には天然資源が乏しいにも関わらず驚異的な経済成長を遂げ得た大きな理由として、優秀で勤勉な人材の存在が挙げられてきました。このことは決して過去の事実のみに止まりません。今後、日本において少子高齢化が進むことがほぼ確実であり、人口総数のピークは平成17年であったといわれております。

今後は人口がかなり減少し、それにつれて労働人口も減少するものと推計されています。もちろん、どの程度減少するのか、現時点ではっきりと分かるわけではないのですが、これまでより少ない人口で、また平均年齢の高い就業者で、ある程度の経済水準を

維持するためには、国民の教育水準を高く保つことが是非とも必要です。結果的に、そのことが生活においても実り豊かな国民生活を実現することに繋がるものと考えられます。

マッセOSAKAは、市町村職員の研修事業と研究事業を行っている全国でも数少ない組織であり、研修事業と研究事業が相まって教育成果を挙げることができるとの考えに立っています。その意味では、規模や対象は異なりますが、大学と同様の目標を有しているといえるでしょう。教育とは、一方的に知識や情報を詰め込むことだけでは決してありません。教育を受けた側が理解し、納得し、またそのことを何らかの形で活かして、初めて教育の成果を収めたといえます。そのためにも、これまで行ってきた研修・教育の充実に加えて、今後は教育・研究に関する多くのノウハウを有する大学、研究所や他研修機関との連携が是非とも必要と感じております。幸いにも、平成18年度において、早稲田大学大学院及び市町村アカデミーとの、それぞれの連携事業が実現できたことは、この方向への第一歩が実現できたものと自負しております。また、この交流を通じて、市町村職員の教育機関であるマッセOSAKAの強みも見てきたような気がします。毎年の活発な活動というフロー面、これまでの活動成果の蓄積や人的ネットワークというストック面で、他機関にない特色があることを再認識しました。

今後とも、市町村職員の教育に有用な組織であるために、努力してまいりたいと考えております。そのことが全国でもユニークな教育組織であるマッセOSAKAの使命であり、そのことを通じて大阪府内市町村の行財政活性化や政策形成能力向上に資することができればと願っております。

最後になりましたが、本年が素晴らしい年となりますよう心からお祈り申し上げますとともに、皆様方のご健勝とご多幸を祈念致しまして年頭のご挨拶といたします。

※『玉葉和歌集』：鎌倉時代の勅撰集。京極為兼（1254年～1332年）が撰者。